

# 少年の悲哀

国木田独歩

青空文庫



少年こどもの歡喜よろこびが詩であるならば、少年こどもの悲哀かなしみもまた詩である。自然の心に宿る歡喜よろこびにしてもし歌うべくんば、自然の心にささやく悲哀かなしみもまた歌うべきであろう。

ともかく、僕は僕こどもの少年の時の悲哀かなしみの一ツを語ってみようと  
思うのである。（と一人の男が話しだした。）

僕は八つの時から十五の時まで叔父おじの家で育ったので、そのころ、僕の父母は東京にいられたのである。

叔父の家はその土地の豪家で、山林田畑でんぱたをたくさん持つて、家に使う男女なんによも常に七八人いたのである。僕は僕の少年こどもの時代をいなかで過ごさしてくれた父母の好意を感謝せざるを得ない。もし僕が八歳の時父母とともに東京に出ていたならば、僕の今日とはよほど違っていただろうと思う。少なくとも僕の知恵は今よりも進んでいたかわりに、僕の心はフォーズフォー스一卷より高遠にして清新なる詩想を受用しうる事ができなかつただろうと信ずる。

僕は野山を駆け暮らして、わが幸福なる七年を送った。叔父の家は丘のふもとにあり、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そしてほど遠からぬ所に瀬戸内内海せとうちの入江がある。山にも野にも林にも谷にも海にも川にも、僕は不自由をしなかつたのである。

ところが十二の時と記憶する、徳二郎という下男がある日、僕に今夜おもしろい所につれてゆくが行かぬかと誘うた。

「どこだ。」と僕はたずねた。

「どこだと聞かっしやるな、どこでもええじゃござんせんか、徳のつれてゆく所におもしろくない所はない」と徳二郎は微笑を帯びて言った。

この徳二郎という男はそのころ二十五歳ぐらい、屈強な若者で、おじ叔父の家には十一二の年から使われているみなしご孤児である。色の浅黒い、輪郭の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌う、飲まざるもまた歌いながら働くという至極元気のよい男であった。いつも楽しそうに見えるばかりか、心ばせも至って正しいので、みなしご孤児に

は珍しいと叔父をはじめ土地の者みんなに、感心せられていたのである。

「しかし叔父おじさんにも叔母おばさんにも内証ですよ」と言つて、徳二郎は歌いながら裏山に登つてしまつた。

ころは夏の最中もなか、月影さやかなる夜であつた。僕は徳二郎のあとについて田んぼにいで、稲の香高きあぜ道を走つて川の堤に出た。堤は一段高く、ここに上ればのぼ広々とした野づら一面を見渡されるのである。まだ宵よいながら月は高く澄んで、さえた光を野にも山にもみなぎらし、野末には靄もやかかりて夢のごとく、林は煙をこめて浮かぶのごとく、背せの低い川やなぎの葉末に置く露は玉のように輝いている。小川の末はまもなく入り江、潮に満ちふくらん

でいる。船板をつぎ合わしてかけた橋の急に低くなつたように見ゆるのは水面の高くなつたので、川やなぎは半ば水に沈んでいる。

堤の上はそよ吹く風あれど、川づらはさざ波だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡おものよう。徳二郎は堤をおり、橋の下につないである小舟のもやいを解いて、ひらりと乗ると、今まで静まりかえっていた水面がにわかには波紋を起こす。徳二郎は、「坊様早く早く！」と僕を促しながら櫓ろを立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入り江のほうへと下りはじめた。入り江に近づくにつれて川幅次第に広く、月は川づらにその清光をひたし、左右の堤は次第に遠ざかり、顧みれば川上はすでに靄もやにかくれて、舟はいつしか入り江にはいつているのである。

広々した湖のようなこの入り江を横ぎる舟は僕らの小舟ばかり。徳二郎はいつもの朗らかな声に引きかえ、この夜は小声で歌いながら静かに櫓ろをこいでいる。潮の落ちた時は沼とも思われる入り江が高潮と月の光とでまるで様子が変わり、僕にはいつも見慣れた泥どろくさ臭い入り江のような気がしなかつた。南は山影暗くさかしまに映り、北と東の平野は月光蒼そうぼう茫ぼうとしていずれか陸、いずれか水のけじめさえつかず、小舟は西のほうをさして進むのである。西は入り江の口、水狭くして深く、陸迫りて高く、ここを港にいかりをおろす船は数こそ少ないが形は大きく大概は西洋形の帆前船で、その積み荷はこの浜でできる食塩、そのほか土地の者で朝鮮貿易に従事する者の持ち船も少なからず、内海を行き来する



和船もあり。兩岸の人家低く高く、山に抛り水に臨むその数数すひや百戸ひゃくこ。

入り江の奥より望めば舷げんとう燈高くかかりて星かとばかり、燈影低く映りて金蛇きんだのごとく。寂漠せきばくたる山色月影のうちに浮かんで、あだかも絵のように見えるのである。

舟の進むにつれてこの小さな港の声が次第に聞こえた。僕は今この港の光景を詳しく説くことはできないが、その夜僕目の映って今日なおありありと思ひ浮かべることのできるだけと言うと、夏の夜の月明らかな晩であるから、船の者は甲板にいで、家の者は外にいで、海にのぞむ窓はことごとく開かれ、ともし火は風にそよげども水面は油のごとく、笛を吹く者あり、歌う者あ

り、三味線の音につれて笑いどよめく声は水に臨める青楼より起  
こるなど、いかにも楽しそうな花やかなありさまであつたことで、  
しかし同時にこの花やかな一幅の画が図ずを包むところの、  
寂寥せきりょうたる月色山影水光を忘るることができないのである。

帆前船の暗い影の下をくぐり、徳二郎は舟を薄暗い石段のもと  
に着けた。

「お上がりなさい」と徳は僕を促した。堤の下で「お乗りなさい」  
と言つたぎり、彼は舟しゅうちゆう中僕に一語を交じえなかつたから、僕  
はなんのために徳二郎がここに自分を伴のうたのか少しもわから  
ない、しかし言うままに舟を出た。

もやいをつなぐや、徳二郎も続いて石段に上がり、先に立つて

ずんずん登つて行く、そのあとから僕も無言でついて登つた。石段はその幅半間より狭く、両側は高い壁である。石段を登りつめると、ある家の中庭らしい所へ出た。四方板べいで囲まれ、すみに用水おけが置いてある、板べいの一方は見越しに夏みかんの木らしく暗く茂つたのがその頂を出している、月の光はくつきりと地に印して寂<sup>せき</sup>として人のけはいもない。徳二郎はちよつと立ち止まつて聞き耳を立てたようであつたが、つかつかと右なるほうの板べいに近づいて向こうへ押すと、ここはくぐりになつていて、黒い戸が音もなくあいた。見ると、戸にすぐ接して梯子段<sup>はしごだん</sup>がある。戸があくと同時に、足音静かに梯子段<sup>はしごだん</sup>をおりて来て、「徳さんかえ？」と顔をのぞいたのは若い女であつた。

「待ったかね？」と徳二郎は女に言つて、さらに僕のほうを顧み、「坊様を連れて来たよ」と言い足した。

「坊様、お上がんなさいナ。早くお前さんも上がつてください、ここでぐずぐずしているといけないから」と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段はしごだんを登りはじめ、

「坊様、暗うございますよ」と言つたぎり、女とともに登つてしまつたから僕もしかたなしにそのあとについて暗い、狭い、急な梯子段はしごだんを登つた。

なんぞ知らん、この家は青楼の一で、今女に導かれてはいつた座敷は海に臨んだ一間ひとつま、欄によれば港内はもちろん入り江の奥、野の末、さては西なる海の果てまでも見渡されるのである。しか

し座敷は六畳敷の、畳も古び、見るからしてあまり立派な室へやではなかつた。

「坊様、さアここへいらつしやい」と女は言つて、座ぶとんをてすりのもとに運び、夏だいたいそのほかのくだもの菓子などを僕にすすめた。そして次の間をあけると酒さけさかな肴さかなの用意がしてある。それを運びこんで女と徳二郎はさし向かいにすわつた。

徳二郎はふだんにないむずかしい顔をしていたが、女のさす杯を受けて一息にのみ干し、

「いよいよ何日いつと決まつた？」と女の顔をじつと見ながらたずねた。女は十九か二十はたちの年ごろ、色青ざめてさも力なげなるさまは病人ではないかと僕の疑つたくらい。

「あす、あさつて、明々やのあさつて後日」と女は指を折つて、「やのあ

さつてに決まつたの。しかしね、わたしは今になつて、また気が迷つて来たのよ」と言いつつ首をたれていたが、そつと袖そでで目をぬぐつた様子。その間に徳二郎は手酌てじやくで酒をグイグイあおつていた。

「今さらどうと言つてしかたがないじゃアないか。」

「それはそうだけれど——考えてみると、死んだほうがなんぼ増しだか知れないと思つて。」

「ハツハツ、坊様、このねえさんが死ぬと言いますが、どうしましょうか。……オイオイ約束の坊様を連れて来たのだ、よく見てくれないか。」

「さつきから見ているのよ、なるほどよく似ていると思って感心しているのよ。」と女は言つて、笑いを含んでじつと僕の顔を見ている。

「だれに似ているのだ。」と僕は驚いてたずねた。

「わたしの弟にですよ、坊様を弟に似ているなどともつたいない事だけれど、そら、これをごらんなさい。」と女は帯の間から一枚の写真を出して僕に見せた。

「坊様、このねえさんがその写真を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも変わらんといいましたら、ぜひ連れて来てくれと頼みますから、今夜坊様を連れて来たのだから、たくさんごちそうをしてもらわんといけませんぞ。」と徳二郎は言いつつも、

止め度なく飲んでゐる。女は僕にすり寄つて、

「サア、なんでもごちそうしますとも、坊様、何がようございませるか」と女は優しく言つて、にっこり笑つた。

「なんにもいらぬ」と僕は言つて横を向いた。

「それじゃ、舟へ乗りましょう、わたしと舟へ乗りましょう、え、そうしましょう。」と言つて先に立つて出て行くから、僕も言うままに、女のあとについて梯子はしご段をおりた、徳二郎はただ笑つて見てゐるばかり。

先の石段をおりるや、若き女はまず僕を乗らして後、もやいを解いてひらりと飛び乗り、さも軽々と櫓ろをあやつりだした。少年こどもながらも、僕はこの女のふるまいに驚いた。



岸を離れて見上げると、徳二郎はてすりによって見おろしていた、そして内よりは燈あかりがさし、外よりは月の光を受けて、彼の姿がはつきりと見える。

「気をつけないとあぶないぞ！」と、徳二郎は上から言った。

「大丈夫！」と女は下から答えて「すぐ帰るから待っていておくれ。」

舟はしばらく大船小船六七艘そうの間を縫うて進んでいたが、まもなく広々とした沖合に出た。月はますますさえて秋の夜かと思われるばかり、女はこぐ手をとどめて僕のそばにすわった。そしてまた月を仰ぎ、またあたりを見回しながら、

「坊様、あなたはおいくつ？」とたずねた。

「十二。」

「わたしの弟の写真も十二の時のですよ、今は十六……、そうだ、十六だけれど、十二の時に別れたぎり会わないのだから、今でも坊様と同じような気がするのですよ。」と言って僕の顔をじっと見ていたが、たちまち涙ぐんだ。月の光を受けて、その顔はなおさら青ざめて見えた。

「死んだの？」

「いいえ、死んだのならかえってあきらめがつきますが、別れたぎり、どうなったのか行き方が知れないのですよ。両親に早く死に別れて、たった二人の姉弟ですから、互いに力にしていたのが、今では別れ別れになって、生き死にさえわからんように

なりました。それに、わたしも近いうち朝鮮につれて行かれるのだから、もうこの世で会うことができずかできないかわかりませ  
ん。」と言つて、涙がほおをつとつて流れるのをふきもしないで  
僕の顔を見たまますり泣きに泣いた。

僕は陸のほうを見ながら黙つてこの話を聞いていた。家々のと  
もし火は水に映つてきらきらとゆらいでいる。櫓ろの音をゆるやか  
にきしらせながら大船の伝馬てんまをこいで行く男は、澄んだ声で船歌  
を流す。僕はこの時、少年こどもごころにも言い知られぬ悲哀かなしみを感じ  
た。

たちまち小舟を飛ばして近づいて来た者がある、徳二郎であつ  
た。

「酒を持って来た！」と徳は大声で二三間先げんから言った。

「うれしいのねえ、今、坊様に弟のことを話して泣いていたの」と女の言ううち、徳二郎の小舟はそばに来了。

「ハツハツ、おおかたそんなことだろうと酒を持って来たのだ、飲みな飲みな、わしが歌ってやる！」と徳二郎はすでに酔っているらしい。女は徳二郎の渡した大コップに、なみなみと酒をついで息もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎がついでやったのを、女はまたもやひ息といきに飲み干して、月に向かつて酒気をほつと吐いた。

「サアそれでよい、これからわしが歌って聞かせる。」

「イイエ徳さん、わたしは思い切って泣きたい、ここならだれも

見ていないし、聞こえもしないから泣かしてくださいな、思い切  
って泣かしてくださいな。」

「ハツハツ、、、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と  
徳二郎は僕を見て笑った。

女は突つ伏して大泣きに泣いた、さすがに声は立て得ないから  
背を波打たして苦しそうであつた。徳二郎は急にまじめな顔をし  
てこのありさまを見ていたが、たちまち顔をそむけ、山のほうを  
見て黙っている、僕はしばらくして、

「徳、もう帰ろう」と言うや、女は急に頭を上げて、

「ごめんなさいよ、ほんとに坊様は、わたしの泣くのを見ていて  
もつまりません。……わたし、坊様が来てくださつたので弟に会

ったような気がいたしました。坊様もお達者で、早く大きくなつて偉いかたになるのですよ」とおろおろ声で言つて「徳さんほんとにあまりおそくなるとお宅うちに悪いから、早く坊様を連れてお帰りよ、わたしは今泣いたので、きのうからくさくさしていた胸がすいたようだ。」

女は僕らの舟を送つて三四丁も来たが、徳二郎にしかられてこぐ手を止めた、そのうちに二艘そうの小舟はだんだん遠ざかった。舟の別れんとする時、女は僕に向かつていつまでも、

「わたしの事を忘れんでいてくださいましナ」とくり返して言った。

その後十七年の今日まで、僕はこの夜の光景をはつきりと覚えていて、忘れようとしても忘れることができないのである。今もなお、哀れな女の顔が目のさきがちらつく。そしてその夜、うすいかすみのように僕の心を包んだ一片の哀情かなしみは、年とともに濃くなって、今はただその時の僕の心持ちを思い起こしてさえ堪えがたい、深い、静かな、やる瀬のない悲かなしみ哀を覚えるのである。

その後徳二郎は僕の叔父おじの世話で立派な百姓になり、今では二人の子の父親になっている。

流れの女は朝鮮に流れ渡って後、さらにいずこの果てに漂泊し

てそのはかない 生しょうがい涯がいを送っているやら、それともすでにこの世を辞して、むしろ静肅なる死の国におもむいたことやら、僕はむろん知らないし、徳二郎も知らんらしい。



# 青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月7日公開

2004年6月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少年の悲哀

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>